平成 28 年
臨済宗・妙心寺派　松岩寺

恭賀新禧（きょうがしんき）

住職　花岡博芳　祝敬

360-0815 埼玉県熊谷市本石 1-102　TEL 048-522-1812　FAX 522-9189
chief@shoganji.or.jp　www.shoganji.or.jp

編集後記

◇左のページで、「他人にものを伝えるのは簡単ではない」ことを書きました。どんなに語り尽くしても伝わらないものがあります。だから、禅では「言葉は月をさししめす指（指月）」だといいます。いくら飛び跳ねようが、ことばを振り回そうが、月（真実）には届かないのです。

◇それほど、言葉は難しいのですが、その上、こうしたお知らせで誤植が多くてご迷惑をおかけしています。テニオハ程度の間違いでしたらご愛敬ですが、日時を誤植してしまったこともあったので深刻です。

◇言い訳をすれば、原稿を書くだけでなく、紙面のレイアウトも自分でして、そのままコピーのような簡易印刷をしています。言ってみれば、監督なしの自作自演ですから、間違いが多くなるという次第です。

◇誤植といえば、紙とペンの時代は線を引いたり、張り紙をしたりで上手にやっても跡が残っていました。綺麗ではないけれど、訂正の過程がわかるのは便利です。たとえば、住所録でいえば、パソコンソフトでは転居前の住所の痕跡がなくなるのは不便です。

◇ところで、最近読んだ夏目漱石の手紙で、「専門」と書くべき所を「専問」と書いているのを見つけて「文豪でも字を間違えるんだ」と安心しました。小説などの作品だったら、編集者が修整して出版するのでしょうが、私的な書簡となると、間違えも大事な記録ですからそのままで、誤字の隣に括弧付きで正字が挿入されてしまうからいっそう目立ちます。

◇なんで、漱石の書簡集などに目を通したかというと、漱石の最晩年に当時の臨済宗の雲水（うんすい＝修行僧）二人と十数通の手紙をやりとりしているのです。しかも、漱石は大正五年十二月九日に五十歳で亡くなりますが、その一ヶ月前の十月末に二人の雲水が夏目邸に逗留して、漱石におこづかいをもらって東京見物をします。漱石に次のような俳句があります。修行僧二人がお風呂にはいって背中を流し合う（風呂吹き）光景です。

風呂吹きや　頭の丸き　影二つ

文豪の最晩年と二人の禅の修行僧が交差したことはあまり知られていないようで、新雪に初めて足跡をつけるような楽しみがあります。少しの間、頭の丸き二人の消息を追ってみます。（住職記）

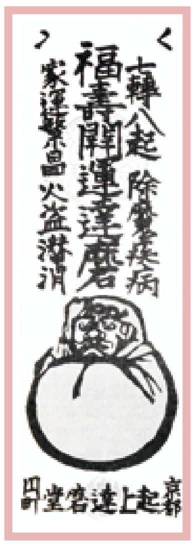
新しい年、大般若寶牘（だいはんにゃほうとく）と墨書された紙札をお配りしました。

大般若経六百巻とそのエッセンスである理趣分を唱え、災いを消し去ろうとするお札です。「牘」は木簡の意味で、「札」の字の部首が「木」であることから想像できるように、もともとは木製だったのでしょう。が、ご存じのように今では木も紙もあります。

問題はこの札をどこにおくかです。お正月に配られたら、ひとまず仏壇へ。ひとまずのはずが、春が来て夏が過ぎて秋になり、年末の大掃除を迎えて、新しいお札が増えてしまう。なんて方もおられます。

そこで、数年前から、次のような一文を書き添えてお配りしています。

「玄関の少し高いところに掲げてください。お札が家中を見まわして、お札の下を往き来する者の災いを除くといいます」。



その効果があったのか、「ひとまず仏壇派」か減ってにんまりしていたある日、とある檀家さんの家を訪ねました。住職の忠告を快く受け入れてくれたのでしょう。正月にお配りした般若札が玄関の高いところにまつってあります。ただし、玄関の外側、つまり屋外に貼り付けてあるのです。お札は防水処理をしてないので、家の中に祀ってほしいのです。というか、常識的に屋内だと思い込んでいた住職の説明不足でした。「玄関の少し高いところに掲げてください」と書いた文章に、「玄関の内側」と書き加えておけば良かったのです。二文字足りませんでした。あるいは、お祀りの仕方を描いたイラストでも添えれば親切だったでしょう。イラストの語源はイルミネーション（照明）と同じ、ルックス（光）だといいます。

新しい年も、不明なものに光りをあてて、明らかにしていく時でありたいと思っています。（住職記）

連続シリーズ「見つけた」

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。

「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」

見つけた！

「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にいくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

今回は日めくりカレンダーに檀家さんの写真を見つけた！

昨年につづいて新しい年も人気沸騰中の日めくりカレンダーに、「まいにち修造」があります。元気になりますが、少し騒がしい。

もっとしっとりとして静かなの。というご希望でしたら、仏教伝道協会の日めくりカレンダーがお奨めです。正月の祈祷法要に参列して希望する方には、おわけしています。先住職の時代には全員の方に配っていたのですが、「使いにくいし、毎年同じ」という陰口が耳にはいってきたので、ご希望の方だけにしました。

仏教伝道協会と聞いて、ホテルのベットの枕元にあるオレンジ色の表紙の英訳「仏教聖典」を思い浮かべる方もおられるでしょう。

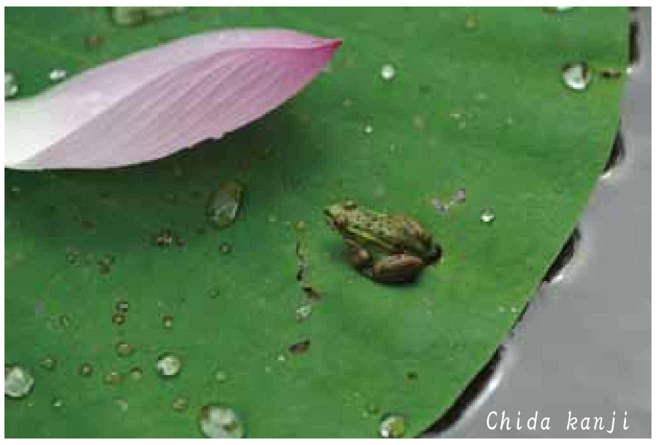
伝道協会は宗派や教団にとらわれることなく、ひろく仏教をひろめるために設立された団体です。

創設者は、沼田惠範（一八九七〜一九九四）という人で、浄土真宗の寺の三男として育ちますが、長じてミツトヨという精密機械メーカーを創業します。その利益を還元して、仏教普及のためにとつくられたのが、仏教伝道協会です。

その協会が二〇一五年に創立五十周年をむかえました。記念事業の一つとして、日めくりカレンダーのフォトコンテストをしたのです。

表紙に採用されれば、賞金１５万円。入選作は３０日分あって、１人あたり賞金５万円。そう豊ではない財団としては、大盤振る舞いです。

そんなコンテストをやっているのは知っていましたが、私自身はカメラのセンスはゼロなので応募する気持ちなどありません。しかし、一昨年の秋ころ、調べたいことがあり、仏教伝道協会のホームページをみていたら、偶然にコンテストの入賞者のなかに知った名前を見つけました。千田完治さんでした。お檀家です。蓮の葉っぱに鎮座しているカエルの写真が入選作。



このコンテストはただ写真を送ればよいのではなくて、あらかじめ一日ごとの言葉が決まっています。その言葉に相応しい写真を応募するのです。

この写真の言葉は、「降る雨は同じである」。毎月６日の絵柄です。カメラのセンスと技術もさることながら、提示された言葉との取り合わせが絶妙です。

確かに、降る雨は、花びらにも葉にもカエルにも池の表面にも同じように降るのですが、雨に対しての感じ方が異なります。

雨がふっても動じることなく、たのしむように自転車をこいでいく若者もいます。雨がふって運動会が中止になって泣き面の小学生もいます。恵みの雨に喜ぶ農夫もいます。みな、それぞれです。それぞれを赦し合うことができればよいのですが、できないから争いになります。

このコンテスト、第３回として今年も行われるようなので腕自慢のカメラマンはどうぞ！